

イスラエルは飢饉に苦しんでいました。また、アラム軍が攻め込んで来て、食糧の確保もままなりませんでした。イスラエル王は預言者エリヤのせいにし、その命をつけねらっていました。

1. エリシャの預言（1～2節）

- ①サマリヤの門で (1)「エリシャは言った。『主のことばを聞きなさい。主はこう仰せられる。『あすの今ごろ、サマリヤの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケル売られるようになる』』」そのような時にエリシャは、周囲の者に伝えました。第一に主のことばを聞くようにという命令です。次に具体的な預言として、明日になれば、上等の小麦粉が安く売られるようになるということ。ここに提示されている額は、6章25節にある、ロバの頭一つが銀80シェケルというのに比べられ、桁違いに安い価格で売買されることになるということです。
- ②天に窓があっても (2)「しかし、侍従で、王がその腕に寄りかかっていた者が、神の人に答えて言った。『たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。』しかし、王の近くにいて援助をしていた人が、エリシャに答えて言ったのです。「主が天に窓を作られるにしても…」という表現は詩篇78:23にもあります。即ち『しかし神は、上の雲に命じて天の戸を開き、食べ物としてマナを、彼らの上に降らせ、天の穀物を彼らに与えられた』。神の恵みと力についての知識は、侍従もありました。しかし、今それは起きるはずがないと否定しているのです。
- ③見ても食べられない (2)「そこで、彼は言った。『確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。』』すると、エリシャは言いました。『確かに、あなたは見ても、食べることはできませんよね』と。実際、人々はすぐに預言の成就を見ることになるのです。この章の末尾にあります。それは次回に譲ることといたします。

2. アラム陣営に進んだ人々（3～7節）

- ①ツァラアトに冒された四人 (3～4)「さて、四人のツァラアトに冒された人が、町の門の入口にいた。彼らは互いに言った。『私たちはどうして死ぬまでここにすわっていなければならないのだろうか。たとい、私たちが町に入ろうと言っても、町はききんなので、私たちはそこで死ななければならない。ここにすわっていても死んでしまう。さあ今、アラムの陣営に入り込もう。もし彼らが私たちを生かしておいてくれるなら、私たちは生きのびられる。もし殺すなら、そのときは死ぬまでのことだ。』イスラエルの民の側では、王を始めとして、事態の打開を図ることができません。しかし、それは思わぬところから生まれました。4人のツァラアト(思い皮膚病)に冒されていた人たちが思い切ったのです。『自分たちはどうせ、社会からは捨てられたようなものだ。どうせ死ぬなら、アラム軍のところに行って、助けてもらおうではないか。殺

されるならそれまでだし、生きることができたらありがたいではないか。』。このように、お腹を空かせた彼らは、出発することにしたのです。

②夕暮れに (5~6) 「こうして、彼らはアラムの陣営に行こうと、夕暮れになって立ち上がり、アラムの陣営の端まで来た。見ると、なんと、そこにはだれもいなかった。主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせられたので、彼らは口々に、『あれ。イスラエルの王が、ヘテ人の王たち、エジプトの王たちを雇って、われわれを襲うのだ。』と言って、」4人はイスラエルの軍にも見つからないように、夕暮れになって出発し、アラムの陣営の端まで到達しました。ところがです。驚くべきことに、陣営のなかはもぬけの殻。実を言えば、主が、アラム陣営に戦車、馬のいななきなどの大軍勢の騒ぎを起こして下さったのです。アラム軍はヘテ人やエジプトの王たちをも味方につけて、我々に向かって攻めてくるのだと思わせてくださったのです。

③逃げ去ったアラム軍 (7) 「夕暮れになると、彼らは立って逃げ、彼らの天幕や馬やろば、すなわち、陣営をそのまま置き去りにして、いのちからがら逃げ去ったのであった。」そして、夕暮れになって、彼らは逃げだしたのです。それも軍の力にもなる、天幕、馬、ろばなどを置き去りにして、いったのです。これはイスラエルにも助けになる兵力です。

3. 罪に気づいた四人 (9~11 節)

①銀や金を隠し (8) 「このツアラアトに冒された人たちは、陣営の端に来て、一つの天幕に入り、食べたり飲んだりして、そこから、銀や金や衣服を持ち出し、それを隠しに行った。また、戻って来ては、ほかの天幕に入り、そこから、持ち出し、それを隠しに入った。」ツアラアトに冒された4人は、天幕に入るや、お腹を空かせていましたから、懸命に飲食しました。また、金銀や衣服も持ち出して隠しました。さらに他の天幕に行っても同じようにしたのです。

②正しくない (9) 「彼らは話し合って言った。『私たちのしていることは正しくない。きょうは、良い知らせの日なのに、私たちはためらっている。もし明け方まで待っていたら、私たち罰を受けるだろう。さあ、行って、王の家に知らせよう。』」しかし、夢中になってそんなことをしているうちに、彼らは自分達がしている罪に気が付き始めました。この日は喜びの日なのに、もしこのままなら私たちはその罪のために罰を受けることになってしまう。

③門衛を呼び (10~11) 「彼らは町に行って、門衛を呼び、彼らに告げて言った。『私たちがアラムの陣営に入ってみると、もう、そこにはだれもおらず、人の声もありませんでした。ただ、馬やろばがつかれたままで、天幕もそっくりそのままでした。そこで門衛たちは叫んで、門のうちの王の家に告げた。』」彼らは、イスラエルの町に戻って門衛を呼び、アラムの陣営について、そこには誰もいないという情報を知らせたのです。ことはすぐに王の家に伝えられました。

《結論》今朝の聖書箇所1~2節については、非常に重要な部分です。エリシャを通して、飢饉の最中に小麦も大麦も格安で売られるようになるという預言の実現のことが章末尾に記されています。そこで、次回にこの2節の預言とも合わせて考えていきたいと思えます。

そこで、今朝は一つのことに絞って考えていきたいと思えます。つまり、アラム軍に取り囲まれたと思いきや、サマリヤにいるイスラエルの側は手を出せませんでした。おまけに、飢饉で民は食糧を得られないという事態です。膠着状態のなかに、打開の道をつけたのは、イスラエルの王や国民からは厄介者にされていた人々です。門周辺の外側で物乞いをしていました。ツアラアトに冒されていた4人です。その一人はもしかすると5章でツアラアトに冒されたゲハジかもしれません。ともあれ、彼らは思ったのです。どうせ、自分たちはもう治らないかもしれない病に冒されている。国は、アラムの軍に攻められていて。飢饉もある。もし、命を失うとすれば、自分たちが真っ先だろう。それならば、アラムの軍の前に出て、命乞いをしようではないか。すぐに殺されたとしても、し方がない。しかし、願いを聞いてくれるという希望をもってチャレンジしたのです。このような、命がけの覚悟で彼らは進んだのです。それを神は用いてくださいました。進むと、アラム陣営は空っぽでした。それを彼らは発見させてくださいました。主は、あのアブラハムがそうであったように、御心を確信し、信仰を持って進む時に道は開かれるのです。道は備えられるのです。

もう一つ、この4人がアラムの陣営に入った時に、食糧はもとより、銀、金、衣服などがたくさんありました。彼らは最初財を隠しました。次の陣営の物も隠しました。しかし、彼らは心のうちに、それが悪いことであると思ったのです。かつて、ヨシュアがエリコを攻めた時に、聖絶のものをアカンがかすめとり、さばかれました。彼らは伝え聞いていた、その出来事を思いだしたのかもしれませんが。ともかくも、自分たちの所有ではない物を勝手に持ち出し隠すことは、罪であると彼らは認めたのです。今ならまだ間に合うのです。それに、今ならイスラエルの人々と共に、良い知らせを分かち合い、喜び合うことができます。彼らはそれらを元に戻し、アラム軍が不在である事を門衛に知らせました。

主はここでも、彼らの心に語りかけてくださったのです。その心に咎めの思いを与えて下さったのです。罪の認識をさせてくださったのです。私どもにも、主は罪の自覚を与えられることがあります。これは正しくないと示されることがあります。もう間に合わないではなく、今がその時なのです。「確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」(Ⅱコリント6:2)。主の前に立ち返る時に、主はその悔い改めを受け入れてくださるのです。讃美歌508『主よ、日に日に、増したまえ、罪を悔ゆる真心を、清めらるる身の幸を 仕えまつる喜びを』作詞者フィリップ・ブリスは福音に生きた人でした。その最後も彼らしいものでした。鉄道事故があった時に、彼は一度は抜け出したのですが、妻を助け出すために改めて戻り、彼も命を落とすことになりました。彼の地上の命は終わりましたが、信仰は遺りました。罪を思い出される方、主の前に告白して、赦しをいただいきたいと思います。